美術科　遠隔学習指導　実践報告

１．題材　　３年「“今の自分”または“なりたい自分”をテーマに、空想画に挑戦！」

２．教材について

本題材は、教材「私との対話」「空想の世界への誘い」を中心に扱い、３年生の遠隔授業で実践した。中学校３年間で生徒たちが成長する姿には目覚ましいものがある。特に、中学卒業後の進路選択を考え始める中学校生活後半には、身体的にも精神的にも共に成長が見られる。客観的に自己を見つめることができるようになってくるこの時期に、それぞれの生徒たちが自分自身に向き合った作品に挑戦することには大きな意味があると考える。思春期真っただ中の中学生にとって、逃げようがない現実の自分という存在を感じ取り、見えてくる自分像を認知することは、時として否定的な見方が強くなることもある。しかし、美術科が担う表現の活動において、生徒たちが安易に肯定的な見方で自分を取り繕うのではなく、じっくりと自分自身に向き合い、自分の良さや可能性を見出していける表現の活動として扱いたいと考えて題材設定した。自分に向き合う題材は、鏡を用いて自画像を描くことが連想されがちだが、本題材では、作品に自分像を様々なかたちで投影させ、“今の自分”または“なりたい自分”をテーマに、空想画に挑戦させることとした。このような題材設定をすることで、今の自分に真正面から向き合って今の自分を模索するか、または、自分の可能性を見据えて将来の姿を組み入れるなどもできる。いずれの選択肢も、中学校３年生である今の自分に向き合う題材として設定している。

また、表現の活動をより深めていくにあたって、教科書や資料集でも取り上げられているパウル・クレー、エドヴァルト・ムンクの作品鑑賞の活動を作品制作にあたっての大切な視点（色・形・作者の心情などの例示）として取り入れた。自由な表現の活動に向き合うにあたっては、どのような表現があるかを知ることも重要である。表現に向き合うにあたって無限の選択肢がある場合には、鑑賞の活動がより豊かな表現につながることとなり、深い意味を持つことになる。

３．本題材の目標／評価規準（重点／記録）

（1）本題材の目標

今現在の自分に向き合ったり、将来の理想とする自分の姿を組み入れたりするなど、自分自身をイメージしながら課題選択して作品の構想を考え、今の心情に合った自分像を表現する。

（2）本題材・本時の評価規準

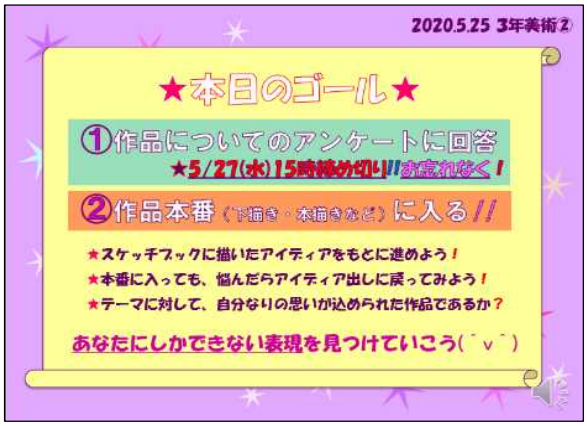
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	さまざまな表現方法を工夫して自分を表すことに意欲を持って取り組むことができる。	自分の姿を見つめて考えたことをもとに、今の自分の気持ちや、なりたいとする自分の姿を思い浮かべ、作品として表現しようとしている。

４．生徒の学習の実際

本題材は、今年度５月の自宅学習期間中に遠隔学習で実践した題材である。対面が一切ない状態でパワーポイントを使った動画で題材の導入をしたため、説明を一通りしてからすぐの制作とはせず、まずは課題としていた“今の自分”または“なりたい自分”をオンライン上のアンケートで選択させた上で

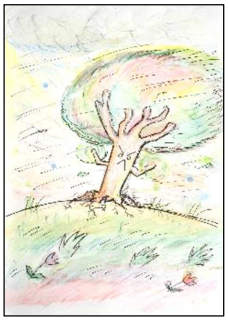
本題材の導入画面

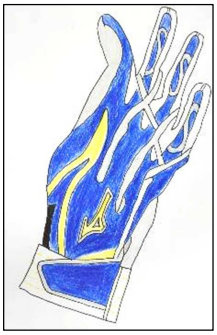
課題選択アンケートの実施通知画面



その理由も問うようにして作品制作のスタートを切った。選択肢を与えたことも、考えるきっかけとしてほしいと考えていたのはもちろんのこと、選択した理由を考えたり述べたりすることで、より作品に自分なりの思いを込めたり、自分を色濃く投影してほしいと考えたからである。アンケートは、ほぼ“今の自分”または“なりたい自分”の課題選択の割合が５０％ずつであった。理由として挙げられていた中には、「今の自分を考えることで、自分のことをもっと知りたい」「この作品をきっかけにしてなりたい自分を考えたい」など、前向きな姿勢で取り組む生徒が多いように感じられた。

この作品は、いわゆる自分の顔を描く自画像に取り組むに限らない作品であり、作品に自分を投影するにはどのような表現方法を考えるかがひとつの課題であった。この課題に対し、生徒たちはさまざまな表現で“今の自分”または“なりたい自分”を表現していた。例えば、野球が好きな生徒はこれからも野球を続けられるようにという願いを込めて、大切にしているグローブを丁寧に描いていたり、なりたい職業に絡めたりして自分像を描き、将来の姿を表現する生徒もいた。今の自分を描いた生徒たちは、進路に対する不安を、さまざまな方法で表現していた。





５．生徒の学習効果と展望

本題材は、遠隔学習で実践した題材であったため、自分以外の生徒が周りにいないこと、作品制作中の時間共有ができないことを肯定的に捉え、生かすことのできる題材であると考えた。一人で集中できるからこそ、周りの目を気にせず、自分自身に真正面から向き合っていく課題として設定した。

思春期真っただ中にある中学生にとって、美術科でできる成果物には多かれ少なかれ気恥ずかしさが伴う。特に、自画像をはじめとした自分自身が投影された作品には抵抗感を強く抱く傾向があり、それが日頃の授業時において表現してみたいと考えることにブレーキをかけることがあったのではないかという点に注目して題材設定した。その結果、生徒たちがそれぞれの家庭で制作した作品やその作品の解説を見ていくと、美術室で活動していた時には生み出されることはなかったのではないかと考えられる作品が多くあった。これらは、落ち着いた環境で自分自身に向き合えるという状況が生み出したものであると考えられる。一方、課題としては、共有できる空間でないことでの技能面における外的刺激が得られないことで、表現幅が狭まってしまったことが言える。生徒たちには改めてこれまで学習してきたことや、表現を豊かにするためのヒントとなる提示をより丁寧に行うことが必要であると感じられた。